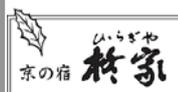


# 国際京都学だより

第十一号 二〇一〇年(平成二十二年)二月十日(水)



編集：国際京都学協会事務局  
〒六〇四八三三 京都市中京区西ノ京小堀町二五三  
ホームページ <http://www.kyotogaku.org/>  
Eメール [info@kyotogaku.org](mailto:info@kyotogaku.org)

発行：国際京都学協会

題字は書家・杭追柏樹(くいせこはくじゆ)氏

## 「京都・ボストン姉妹都市提携五〇周年を迎えて」

島田 崇志(京都ボストン交流の会常任理事)

京都市と米国・ボストン市が姉妹都市提携を結んで、今年(二〇〇九年)は丸五〇周年になる。ボストンは、アメリカの歴史のなかで、常に文化・学術に重要な役割を果たしてきた歴史都市で、今も大学のまち、医学やハイテク産業の中心地として発展している。

京都とボストンの両市は、一九五九年六月の姉妹都市提携以降、青少年使節の相互派遣、音楽、美術などの文化交流などで親密な交流が続いている。なかでも、姉妹都市提携二〇周年にあたる一九七九年に京都がボストンに寄贈した京の町家は、明治建築の西陣の町家を船で運び、ボストン子供博物館内に復元移築したもので、今も年間三〇万以上の人が訪れ、日本のくらしや京都を体感できる貴重な場所となっている。

一九九七年に発足した「京都ボストン交流の会」は、これまで市民レベルの各種交流をすすめてきたが、特に四〇周年のときには約七〇名の市民親善交流団がボストンへ行き、交流を深めるとともにボストン子供博物館を中心に京都の伝統産業、文化などを紹介している。その後もアメリカ学の講座など各種事業を行い、両市の相互理解、友好交流につとめている。

二〇〇九年も、五〇周年記念事業として、京都市とともに次のような多彩な事業を行い、いずれも多くの成果があったことを報告する。

一、八月三日、四日にボストン子供博物館で、町田弘法氏指導によるチルドレンズ・ミュージアム京都プログラムが行われ、約四千名の入場者で、大変な盛り上がりがあった。

二、八月八日、わかさスタジアム京都(旧西京極球場)で、京都とボストンの青少年交流試合が行われ、両市の野球少年は懸命なプレーを披露した。

三、八月二四日から三〇日まで門川京都市長などの代表団がボストンを訪問し、二五日に記念式典などが行われ、両市のきづなを再確認した。この折、当交流の会副会長、畑正高氏の協力で、長刀鉾からゆかたが寄贈され、これに帯などをつけて、ボストン側に贈った。

四、十月三日、京都駅室町小路広場で「ボストンの夕べ」を開催し、また十一月二二日には、元春日小学校で、ボストンで開催したチルドレンズ・ミュージアムの報告会を兼ねた催しを行ったが、いずれも盛況であった。

そのほか、ボストンでは、門川市長訪問中に、京都市内など五一大学が加盟する「大学コンソーシアム京都」とボストンの六大学との包括交流協定が締結され、さらに相互交流・研修をすすめることで合意した。また、五〇周年記念シンポジウムも行われ、京町家などを例に歴史都市の保存再生について、両市の専門家が意見を交わし、両市が今後も学び合い、新たなまちづくりを生かしていくことを確認し合った。

最後に、京都ボストン交流の会としては、この五〇周年を契機に、京都とボストンの友好がますます深まるように、今後も幅広く各種事業を行っていききたいと考えている。

## 第十五回 国際京都学体系研究会(二〇〇九年三月十四日)

### 「京の着だおれ」

市田ひろみ(服飾評論家)

わざわざお越しいただいたり、長いあいだお会いしなかった方もあるの  
で、ちよつとご報告というか、うれしかった話をさせていただきます。

外務省から洞爺湖サミットで各国首脳の奥さま方に日本文化を紹介し  
てほしいという連絡がありました。百回以上、外国で日本文化の紹介とか  
をさせていただいてきたので、一時間で組めるプログラムを出しました。着  
物ショーを外国でするとき、書道の実演をいたしましたら神秘的に感じて  
いただいたものですから、まず「ふるさと」という私の詩(「spiritual home」と  
訳してくださいました)、赤と黄色と白のモザイクのような雲があった遠い  
日というのを書かせていただいたんですね。

それから『源氏物語』の千年紀の年でしたので、『源氏』の話に十二単の着  
付けをかぶせながら、びつたし一時間で日本の文化を紹介させていただき  
ました。ロシアの大統領の若い奥さまは、とても興味を持たれて質問をし  
てくださいました。ブッシュ大統領の奥さまローラさんが、自分は書が好きで  
書いているのを見たが非常に感動した。コピーはないのかとおっしゃった  
ので、「ありません」と言いましたら残念そうでした。しばらくしたら、お礼状  
が来ました。黄色い封筒に「The White House」と書いてあったから、新しい  
レストランのオープンかなと思つたら、「The White House, Washington, D.  
C. 2090」。「ええっ」と思つて見ましたら会場風景の写真を十枚ぐらい、そ  
してホワイトハウスの便せんにお礼状が書いてありました。

もう、書かないかんわと思つて「ふるさと」の詩を書き、表具をいたしまし  
てホワイトハウスへ送りました。そうしたら十月十日、郵便物の中にあの見  
覚えのある封筒。「あなたの creative talent に尊敬を持っている」とか、もう  
ほんとうにうれしいことを書いてくださつて、すぐに外務省へ「えらいこち  
ゃ」と電話をしましたら、民間人に対して極めて珍しいことですつて。大事  
にしてくださいねとおっしゃつたので、『なんでも鑑定団』に出したらあかん  
なと思う次第でございます。

書道が好きだとおっしゃつたのは、決してお世辞ではなかったこと、書や衣  
装とおしてお近づきになれたことは、とつてもうれしいことだったなと思  
つて、みなさんにご報告を兼ねて、ご紹介をさせていただきます。

本題の「京の着だおれ」に入ります。京都つても得をしていて、私が京  
都の着物の先生ということ、どれだけ信用されていますか。京都ブランド  
のすごい付加価値だと思えますね。「京の着だおれ、大阪の食いだおれ、神  
戸の履きだおれ」は、よくご存じですよ。大阪の食いだおれは、なんかそん  
な感じではないですか。神戸の履きだおれはやはり西洋の文化が入つてきた  
港であつて、やっぱり洋服に対する憧れや、外国人の履き物に対する興味  
もあつたのではないかなと思つています。

京の着だおれというのは、ぜいたくをして身上が傾くほど着物にお金をか  
けているかと言うと、そうとは思いませんね。ご承知のように京都は「しまつ  
する」という言葉がありますね。ぜいたくをしない。むだ遣いをしない。「捨  
てるのは最後え」。「もう大事にせなあかん」で、捨てるのは最後やで、いらん  
電気消しや。使えるものは最後まで使わなあかん」といわれる、そういう  
「しまつ」ですね。これは大阪のけちとは違うんですよ。これは大阪の悪口で  
はなくて、ちゃんと吉本の社長が「どケチ人生」と書いていらつしやいます。  
あの人はちつともけちと違うんですよ。私もヒルトンで、お茶をおこつてもら  
いましたわ。出さなくてならないことを出し渋ることはけちでしょうか。

じゃあ、着だおれはどうなのと。これは京都の人の賢い見せ方ではないか  
なと思ふんです。噂で「あの人、このあいだの結婚式も、ええの着てはつた  
な。それに、お茶会するときのお着物の、ええ色で、今日のまた小紋もええ  
な」。京都の人は、こゝ一番というときに、うまくいい着物を着るのでしょ  
うね。そうすると、いつもええのを着ているように見えるんです。決してぜいた  
くでも何でもなく、見せ方のうまさではないでしょうか。

昔からそういう気質があるんですね。京風、江戸風というのがあります。  
私はいま、着物の仕事をしておりますけれども、たしかに東京の展示会と  
京都の展示会と、お客さまの好まれる持ち味というのは全然違うんですよ  
ね。それはもう学問的にどうこうということは言えないけども、そういうの  
があります。どちらがいいとか悪いとかではなくて、明らかに江戸風、京風  
というのがあってはならないかなと思つていますね。

江戸時代、元禄のころの有名な話で、東山の世阿弥寮というところで呉  
服屋さんが仕掛けたんですよ。衣裳くらべというのがありました。いず  
れ劣らぬ衣裳道楽のおかみさんたちが、自分のこごぞと思つ着物を着て出  
てくるわけです。

最初に出てきたのが、江戸の石川六兵衛のおかみさんでした。どんな衣装

装を着て出てきたかと申しますと、黒無地にナンテンの立木をあしらって、ナンテンの実のところには、本物のサングが縫い付けてあったと。一同声もなし。

二番目に出てきたのは、大阪の淀屋辰五郎という人のおかみさんでした。この人は若妻と書いてあります。緋縮緬に京名所を染め抜いた一品であった。糸目友禅で金閣寺とか清水寺とか、京名所が染めてあったんでしょね。これもまた一同声もなし。

さて、最後に出てきたのが京都の中村内蔵助のおかみさんでした。どんな衣装で出てきたかと申しますと、白無地の小袖に黒無地の小袖をはおっていた。周囲に色目も鮮やかな友禅染を着せた女性たちをばらせて、真ん中に白と黒で「すつく」と立った。これはまた際立って美しかった。軍配は、見事に中村内蔵助のおかみさん上がったということでございます。

これが見せ方なのです。見せ方上手。白と黒だけだったらつまらないと思う。でも、まわりに色とりどりの着物を着た人をはばらせて、そのなかで白と黒がくつきりと映えたでしょうね。これには、尾形光琳のアドバイスがあったと言われておりますけれども。

本阿弥光悦のときに、伊春という人が雁金屋というのをつくって、代々いわば高級顧客を相手にする呉服屋で繁盛いたしました。第四代目の当主が宗謙という人で、尾形光琳とか、乾山のお父さんです。五代目で藤三郎という人が雁金屋を継ぐんですけども、そのころからだんだん雁金屋が傾いてくるんですね。顧客のなかには東福門院和子とか淀君とか、素晴らしいステータスを持ったセレブのお客さまがお取り引きだったんですけども、東福門院なんか半年間で着物を、いまのお金で一億円ぐらい買えるものをはったみたいですね。だから、雁金屋はもう得意絶頂。だけど、手形が落ちないんですね。宗謙から藤三郎に引き継がれていくころには、だんだん倒産の方向に行くんですね。財産を兄弟で分けて、尾形光琳は文化人として、乾山は陶芸家としての道を選んで、それぞれ立派な芸術家ではありましたが、けれども、実を言うと有名な呉服商の息子たちであつたんですね。当時、中村内蔵助のおうちにも、尾形光琳はお世話になっていたらしいんですね。尾形光琳の作品のなかで、たった一枚だけ中村内蔵助の肖像画を描いております。だから親しくしていたんでしょね。

東京国立博物館に尾形光琳の秋草図の小袖がございます。これはやはり光琳が深川の木場の冬木家に逗留しておりまして、その奥さまのために白地に秋草図を書いたんですね。私もだいぶ前に、東京国立博物館で拝見し

たことがございます。えらい身丈短いなど思った記憶があるんですけども、いわゆる琳派の秋草図でございまして、逗留をさせてもらったお札に描いたものではなかったかなと思います。

見せ方というのは感性が決めるものなんです。『TVタックル』という番組で田嶋陽子さんとえらいけんかをしました。あの人は人の話を聞かあらへん。夫婦茶碗が女性差別や言わはるんです。何で男の茶碗が大きいって、女の茶碗が小さいか。冗談みたいなことを怒らはるんですよ。いわゆる夫婦茶碗の一つの美学ですからねと言うても、「第一、あんたの着物なんか、女性が虐げられてきた時代の遺物よ」と言わはつたから、おい待て、おいとは言いませんけど、これは日本人の民族衣装ではないんですかと言うたんやけどね。もう三回も四回も、けんかしているところが放送されました。

見せ方というのは五条坂をご覧になつても、ガラスケースの中にお茶碗やお皿やらが並んでいますか。一品ですよ、ひと品ですよ。せいぜい夫婦茶碗が出ていたり、あるいは同じ柄のものが、ちよつと斜めに置いてあつたり、ちよつと一輪挿しになんか挿してあつたりね。決して、ごちゃごちゃ並べるような見せ方は、京都の人はしないんですよ。これは京風なんです。これでもかという見せ方はしないですよ。田嶋さんにはわかつてもらえないけれども。

京都の夏は、もうやりきれない暑さです。ますます温暖化で、衣替えがちよつと変わってきたなと思つているんです。五月の連休に袴(あわせ)なんか着てられませんかよ、いま。私は五月になったら単衣(ひとえ)です。十月いづばいは単衣を着ています。「いいんですか」って言わはる人があるんです。だから無理しなくていいですよ、暑かつたら暑いように、寒かつたら寒かつたように、自由に着てほしいなと思つています。

着物の選び方の感性というか、いわゆる着物と帯の組み合わせですね。京都の場合は着物が帯になじみ、帯が着物になじむという組み合わせ方をするんですね。ところが江戸、東京の場合はいまでも、着物と帯の組み合わせはめりはりをつけるんです。ちよつと想像していただきたいんですけども、例えば、薄いピンクの訪問着があるとしたら、帯の組み合わせは地の帯か、落ち着いた朱色の帯ですよ。そういうのを薦めしても、東京の人は受け付けません。東京の人は、やはり江戸風と言うのでしょうか、ピンクの訪問着に黒地の帯をばきつしたり、紺の帯をばきつしたり、めりはりをつけるんです。私は着物が帯になじみ、帯が着物になじむというのを

京風とするならば、めりはりをつけるのは、もしかしたら江戸風かなというふうにも思っております。

祇園祭も、昔は七月一日から後の祭りが終わるまで一カ月間は中京は祇園祭ですよ。私も四条の新町西洞院のあいだを上がったところで、狭い京町家でしたから奥の二階が私の勉強部屋だったんですよ。そうしたら新町四条上がるが放下鉾で、おはやしをしているところと私の勉強部屋と、もうほんとうに十メートルぐらいしかなくて。そのうえ、やつぱりお祭り目指してお客さんが来るんですよ。下で「いやあ、こんばんは」とか言っている母の声が聞こえ、いや、誰やろうなと思うと、勉強も手に付かない。

祇園祭の一カ月、中京の商家の例えば室町、新町、四条通と言うと呉服問屋さんが特に多いですよ。そうするとやつぱり、おかみさんたちこ一番なんですね。でも、決して際立った極端なものに着ないんですよ。さりげなく着るんですね。これがやつぱり見せ方のうまさなんですね。

驚かされるのは、夏の麻の小袖なんです。白地の麻に茶屋辻模様が藍濃淡で、全体に描かれているんですよ。でもそれは、そばへ行つて見ると、描いたものではなくて縫いなんです、全部刺繍なんです。祇園祭で得意先のお客さんたちがお祭り目指して来ますよね。そうすると、おかみさんが白麻地に藍濃淡の茶屋辻の着物をさりげなく着て、「暑うおすなあ」と言いながら、「えつて気がつくんですよ。何とそれはすべて手縫い、縫いの着物。」「さすがおかみさん、ええの着てはりますな」。そうすると、おかみさんは「いや、たいしたことおへん」。でも、心の中では「どんなもんじやい」と。これは同時に、自分のだんなの甲斐性を見せているんですよ。「うちのだんなはんは、こんなん着せてくれはんねん」。女の装いというのは、ただ趣味、嗜好を越えて、家のステータスにもなっていたのではないかなと思うんですよ。

一生忘れられない失敗が一つございます。昭和四十年代、ツイギーという小枝のようなモデルさんがミニスカートで日本にも来ましたね。マリー・クワントというデザイナーは、これで大英帝国勲章までもらっているんですよ。つまり産業として、非常にいい経済効果があったわけですよ。私は、ミニスカートを見たときに、「あ、いやらしい」と思ったんですよ。女がももまで出していた。いまの若い人にはこの感覚はちよつとないかもわかんないけど、私たちの世代は、「ええつ」と思いました。忘れもしません、京都新聞から「ミニスカートをどう思いますか」という電話取材でした。私は「六等身の日本人には似合いません。これは流行しないでしよう」と言いました。そのと

おり新聞に出ましたが、隣に書いている人がすごい人でした。亡くなりました藤川延子さんのコメントで「あれはかわいい、日本にも大流行をするでしょう」。もう見事に私は予測を誤ったんですよ。

当時、佐藤栄作総理大臣の奥さんがアメリカに行くのに、JALのタラップのところでミニスカートで「行ってきます」と。「うわあ、もうえらいこと言ったなと私は思いましたけど。もうそれから、流行の観測はあかんと。私には才能はないと。」

(中略)

明治九年ごろに日本へ来たドイツ人ベルツの日記で、日本人の奥さんハルさんが、あるとき黒い羽織を着た。そして裏にいっぱい模様を描いてあったので、ベルツさんが「日本人はどうしてそんなきれいなものを表に出さないで中に隠すの」と聞きました。そうしたら、ハルさんはこう答えました。「貴重なもの、大事なものは、そうやたら見せびらかすものではありません。そういう大事なものを見せびらかすのは下品なことですよ。」

やはりそれも日本人の一つの特性ではないかなと思うんです。じゃあ、見せ方上手というのだけが京の着だおれかと言うと、そうではなくて、実は調和ですね。みなさん方もお茶会があるというところ、「ちよつと、何を着ていきます」と先生に聞いたり、一緒に行く人に聞いたりしますよね。これも調和なんです。一人だけ飛びはくれたものを着たり、目立つものを着たりしては調和を乱すわけです。こちらへんにもなんかバランスの美学みたいなものがあるような感じがしているんですよ。すけれどもね。

着だおれというのは、ちよつと薄つぺらなイメージで言われてきたけれども、実はそのなかに京女らしい心遣い。私も十年間、『京都迷宮案内』というドラマでは、自前の衣装で無地とか小紋とかでとおしました。もしも京都もののドラマを見て、きらびやかな訪問着で「おこしやす」とおかみさんが出てきたら、それは老舗ではなく新参者です。

今日も終家のおかみさんがいらしてますけれども、いつも感心いたします。名門のお茶屋さんとか、旅館のおかみさんは決してきらびやかな訪問着で「おこしやす」とはいたしません。お客さまに対する心遣いなんです。お客さまに恥をかかせてはいけません。だからちよつと控えめな衣装。そういうところにも、なんか控えながら自分を引き立たせる、そういう賢さが見えるような感じがいたしますね。

ちよつと時間がまいりましたので、このへんでもう終わりいたします。

### 第十三回 国際京都学体系研究会(二〇〇九年一月十七日)

#### 「京の都の資源学―都を支えた石と水」

原田 憲一(京都造形芸術大学教授)

『地球時代の文明学』(京都通信社)に「地質文明観」という論文を出した。梅棹先生の『文明の生態史観』は、農業生産の時代では有効な考え方であることは間違いないが、農業生産から工業生産に移っていけばいくほど、資源という問題が大事になってくる。人が住むためには広い空間が必要で、地盤の問題や農業を支える土壌の問題、岩石の質、あるいは地盤の質というのが非常に効いてくるわけで、そういう観点から文明を考えたい。

「なぜ平安遷都が行われたのか？」を資源から考えてみると、やはり奈良盆地には決定的に資源が足りなかった。長岡京も水資源も含めて資源が足りない。平安京の京都盆地は、それに比べると非常に豊かな資源を持つており、そのなかで、明治まで最先端の手工業都市だったわけです。京都を単なる歴史都市とか宗教都市で、天皇、神社、そういう権威にすぎた歴史都市というのはまちがいです。京都は明治まで最先端の手工業都市で、最高品質のものをつくっていた。いまでも伝統的集積都市なわけです。京セラとか、オムロンとか、任天堂とか先端的な技術の集積都市なのです。

生産基地としての平安京を砥石(研磨)の例で説明してみます。京都の鳴滝石というのは、世界でも最高級の砥石です。鎌倉初期に鳴滝石が発見されて、合わせ砥、仕上げ砥は、この鳴滝のものが一番いいと言われている。砥石は刃物の磨き、漆の磨き、鋳物の磨きに使われる。だから、伝統的な手工業の刃物、漆器、鋳物、全部にかかわっている非常に重要なものだ。その副産物である砥の粉も、実は、錆漆であるとか、おしろいであるとか、木工塗装の下地、目止めなどに使われている。

どうして鳴滝に砥石が産出するかを説くと、日本列島の地質の形成を二億五千万年ぐらい前のゴンドワナ大陸にさかのぼることになる。ともかく世界でも珍しい保水力も吸水力もいい多孔質の石が北山の山地の地表に出てきた。

一六四〇年代にできた京都の名産品を集めた地図で見ると、石材は、京都の北西のほうです。白川石、御影石とか鞍馬石、庭石、それから鳴滝石。盆石になるのは加茂石とか貴船石。東山沿い清水寺から稲荷、深草、墨染、伏見にかけての大坂層群が粘土系の資源で、瓦とか伏見人形

の土、弁柄、赤土です。それから付木として使った硫黄木です。

長岡京のところは資源の空白地帯で、タケノコぐらいで、木材もないし、野菜も取れない完全な空白地帯で不思議なものです。長岡京は結局、桂川が氾濫し巨椋池がしょっちゅう水位を変え使いづらい。ですから、ここは地形的には平坦地で選ばれたのかもわかりませんが、非常に使い勝手が悪かった。

京都市内ではそれから京野菜、マツタケ、そういうものが常にたくさん出てきます。各水系には川魚がたくさん取れます。鞍馬、大原、八瀬は炭とか黒木(まきにする)というものがあります。

とにかく平安京は、非常に水の面からも、災害の面からも、資源面からいいということになります。盆地から流出が九〇億トンで、河川水は灌漑用水とか染色とかに使われ、地下水は生活水、食品の製造・加工、醸造に使われる。京都の地下には二百一億トンの水が地下水として蓄えられており、ほぼ琵琶湖の二七五億トンに匹敵する。京都の中小河川で水が二〇センチ流れていれば充分平底船で、驚くぐらいのものが積め、そういうかたちで物流ができたのだろう。

京都盆地を見ると、後背地が広がっているいろいろなものがあります。『延喜式』で食材をどこから集めてきたかを見ると、日本海側の陸奥、佐渡、因幡、伯耆からも来ている。それから大阪湾も。太平洋側は下総、遠江、常陸あたりから。九州は一度太宰府に集めて、そこから運んできたという。非常に広い物流網が、平安時代中期から確立して京都に運び込まれていた。

紀伊半島の銅とか、鉛とか、いろいろな資源はあるが険しすぎてなかなか開発できなかった。それに比べますと、京都から亀岡、篠山、そういうところを抜けて福知山を通して、日本海に出られる。あるいは瀬戸内海を通るとか、あるいは琵琶湖を利用して敦賀、若狭のほうに抜けるというふうな地形で、水路はもちろん陸路も発達していた。野菜などは、京都盆地で取れたが、米は近江から、若狭から水産物を運ぶ。木材とか竹は、山科と北山から遠いところは丹波から運んできた。

銅の鉱床は紀伊半島にたくさんあるのですが、そこはもうあつても使えないのです。奈良盆地の周辺には、ほとんどそういう鉱床がないのです。京都より北のほうには、マンガン鉱床とか、銅の鉱床。こういうところの緑青とか群青が顔料として、あるいは釉薬として運び込まれて使われる。銅はもちろん地金として運び込まれます。

その他の金属資源で大和水銀、真赤土とか丹生、水銀、丹波や但馬に

は金、銀、銅、鉛、亜鉛がたくさんあります。それから、焼きものの土の原材料、鉱石、陶土も信楽あたりや北のほうにもあるということ、奈良よりも圧倒的に京都のほうが、後背地の豊かさも違うし、物流網も発達していた。

京都盆地だけで生産が続いたのかと言うと、決してそうではなくて、周辺の広い後背地がさまざまな資源に恵まれ運び込んできた。明治までの手工業レベルでは十分な資源があり、天皇あるいは神社の中心地として安定した環境のなかで、手仕事の集団を組み上げてきた。京都の場合は、完全分業で作業はおこなわれているので、職人集団を動かさない限り生産地のもは動かない。江戸ではそこまで成熟する期間がなかった。

地質文明観と平安京研究ということで、文明というのはハードウェアとソフトウェアで成り立つ。京都を取り巻く自然条件は変わらないが、社会条件を変えていくことでそれをより豊かに使うことができるだろう。平安京が千二百年間、技術も発達させながら、周辺の資源をうまく使いながら、常に最先端の生産基地であった。この謎を何とか解明していきたい。

#### 第十四回 国際京都市体系研究会(二〇〇九年二月十四日)

##### 「京の都は製鉄の中心地―原田説の補強のために」

瀬戸口烈司(京都大学名誉教授)

京都は刃物の一大生産地だった。砂鉄を使う場合は、分業をせずに一貫生産をする。砂鉄が地方から送られてきて、京都が鉄生産の中心地だったということは、製鉄、つまり、たたら生産まで一気にやっていた可能性がある。ただ残念ながら、日本史の専門家でもないのに、どの程度の規模の製鉄を京都で実際にやっていたのかわからない。

タイトルに「製鉄の中心地」としたのは、ちよつと行き過ぎかもしれない。しかし職人は鉄に対してものすごいくうるさいから、ほかの人がつくった鉄よりも、自分たちで砂鉄から鉄をつくっていた可能性があると、今日の話は進めたいと思います。

西暦一〇〇〇年、そのときの世界の5大都市は、コルドバが一番大きくて四五万人。中国の開封が四〇万人。コンスタンチノープルで三〇万人。アンコールで二〇万人。平安京が十七万人ということ、ものすごい人口を抱えていた。つまり、その十七万人都市で神社仏閣をつくるわけです。その神社仏閣をつくるのは誰か、宮大工です。天皇家を中心とした貴族が住んで

いて、庶民が住んでいる。その家をつくるため大工など職人が使う刃物そのほか、それから、料理人が使う刃物そのほか、平安時代からものすごい鉄の需要があつて、それを実際に京都周辺でつくっていたのではないのか。

平安から鎌倉、室町のあと、名工と呼ばれる刀鍛冶が備前、備中にいろいろいるが、それにならんで、京都に粟田口鍛冶の国家、吉光は玉鋼を使います。蹴上げのちよつと西側になりますか。あのあたりの刀鍛冶は、砂鉄から鉄をつくり、玉鋼をつくる一貫作業をやっていたのではないかと思われまます。それで、銑鉄を使うのが、京都三条の釜座。

平安京にもものすごい鉄製品の需要があつたはずで、この需要をまかなうためには、製鉄製鋼の加工は一貫事業であつて分業はしていなかった、ひよつとしたら、京都でもかなりのたたらによる製鉄業はやっていたのではないか。

長篠の合戦で三千丁の鉄砲を使った。次に、文禄・慶長の役(秀吉による朝鮮征伐)のときに使った鉄砲が六万丁とか八万丁。関ヶ原の合戦で一〇万丁。大坂の陣では一〇万丁ほどの鉄砲が使われた。だからものすごい量の鉄砲、それ全部国産の鉄でやっているということですから、だから国友鉄砲衆は一時、もうかつたでしょうね。

問題は製鉄、鉄製品の産地というのは、いったい何で決まるのか。砂鉄の原産地の近くなのか、それとも鉄製品の消費地の近くなのか、多量の木炭とか、良質の耐火粘土がたくさん採れるところなのかということから考えたら、需要が多くて、多量の木炭、それから耐火粘土などが非常にたくさん採れる京都というのが、その意味では立地条件がよい。砂鉄は出雲から持ってくればよかつたのだから、やはり京都というのは、鉄製品をつくるだけではなくて、砂鉄までやっていたのではないかというのが、私の想像です。実際の細かいことや詳しいことをご存じの方がおられたら、ぜひお教えいただきたいと思ひます。

(文責 国際京都市体系研究会事務局編集部)

【編集部から】今回の十一号は市田さんの講演を盛り込むため増ページになった。会場は国際京都市体系研究会が始まって以来の盛況で、着物姿も多く華やかな雰囲気につつまれた。当日は宮崎友禅斎、馬王堆の女性の衣裳、源氏物語の挿話や喪服の色や市松模様など、かずかずの豊富な話題に触れられたが、残念ながら紙面の都合で割愛させていただいた。

